

理研会報

発行
印教研理科研究部
事務局
成田市立成田小学校
成田市幸町948-1

一〇・一 印教研理科研究部集△△

講師と△△員の声

小学校低学年 講評

高橋 正昭先生

三、四年生の子どもたちはほとんどの子が理科が大好きです。特に実験や観察を通して未知の体験をすることを好みます。しかしながら、現状は豊かな体験を十分保障しているのだろうかと考えさせられることもあります。

今年度の各部会の提案をみると、一部の教師サイドにメスをいれた新しい取り組み、二部会のコンピュータを利用した授業実践、三部会の生物分野の系統的な指導、四部会の広報活動を通じた興味・関心を高める指導、五部会の心情を高める指導など、それぞれの部会や研究員の方々が課題の解決に努力されていました。

各部会それぞれ研究主題に則し努力していますが、視点を改めて研究発表を聞く側で考えてみると次の点が言えます。研究を始めた時の子どもたちと、各部会が主題

通して、動物体と同様に植物体の完成された姿の一端をつかませ、子どもたちの理科的心情を育てようとする五部会提案は、共に植物にしてもメダカにしても、一人一人の子どもに自分だけのものを持たせ、直接向き合う場を確保してあげることは、学習を進めていく上での基本であることを示してくれたように思えます。いずれにしても体験活動の場の設定が必須のこととなってきます。

三・四年生は、前述したように豊かな体験が子どもたちにとって必要不可欠です。理科が大好きでたまらないというような子どもが増えるように、研究の厚み深みを一層増す研究の実践にご尽力いただければ有り難いと思います。

この度の教研では、総じて一人一人の子どもの直接体験の重視ということを念頭に置いての提案であったとの印象を受けました。今期強く取り組んだ姿が印象的な三部会提案、また植物の学習を

小学校高学年 講評

石田 正光先生

広報誌という一つのメディアを学習に活用していくとする四部会の提案でしたが今後の工夫の仕方によっては新たな実践が期待できます。また地域特産物の教材化も興味深いものになりそうです。

一、二部会の発達段階に応じた理科学習の工夫への取り組みは、これから研究を進めていく上で子どもたちの実態を科学的におさえ、部会としてねらっていることをより鮮明にして今後の研究に努めていただきたい。

中学校 講評

宮本 久男先生

今回の提案は、教材開発と新し

い学力観に基づく理科指導のあり方が中心で、参加者も参考となる点が多かったものと思われれます。まず教材開発については、例年以上にすばらしいものが多くありました。授業において有効に活用していただけたらと思います。

生徒の選択を取り入れた複線型の授業については、多くの先生方が取り組み始めているところであり、新しい学力観が求められる資質・能力を育てるためには極めて有効なものではあるのですが、実践に当たっては留意しなければならぬ点も多くあります。

主なものとしては単線と複線を結びつけた効果的な指導計画の立案、順序性の問題、学習形態の工夫、教材・教具の準備、安全性、生徒の訓練、時間の確保、理科室等の整備、地域の自然の教材化等があげられます。また、複線とはいつでも教師の対応の限界を越えて選択の幅を広げたり、自分なりの学習はもちろん大切なのですが、知識・理解や技能がおろそかになるようなことがあってはなりません。周到な準備をしたうえでないと効果の上がる指導は難しくなります。

以上のように、気をつけねばならない点も多く準備も大変なのですが、生徒の意欲・思考力・判断力・表現力を養い、理科好きの生徒を育てるためにも、是非試みていただきたいと思います。

△△ 員 の 声

低学年分科会より

内野小 湊 康志先生

今回の研究会で、とても印象に残ったことは、どの部会の研究も従来の指導方法にとらわれない広い視野に立った、斬新で画期的な実験器具や指導方法が研究されていたことです。一部会の子どもの発達段階に着目した指導内容は、私たちが授業を進めていく上で、重点を置いて考えていかなければならないものだと感じました。二部会の発表では、コンピュータの効果的な活用方法を研究している実際に授業の中で実践している内容のものでした。三部会、四部会、五部会の発表はともに、子どもたちが自然を身近に感じることができるよう様々な工夫がみられました。ペットボトルによる一人一実験の教具の工夫など、どれもクラスに持ち帰って実践してみたいと思うものばかりでした。

「高学年分科会より」
千代田小 中山 昌洋先生
時代の変化に合わせて今回の研究会でも今日の課題に取り組む提案があった。コンピュータの導入が進む状況を考え、その活用の方角性を示した二部会の提案。理科離れが進む子どもたちに理科のおもしろさを気づかせるため、情意的な面からアプローチした五部会の提案。その一方で身近な自然の教材化や、直接体験を重視した学習の方法など、今も昔も

中学校分科会より

玉造中 小野 哲先生

学力テストの分析から、知識はあっても科学的思考力が育っていないという指摘が文部省よりあった。実際に授業を進めていても、教える前から知識はあるが本質を理解していない生徒や、問題を解くことはできるが実験の考察がでない生徒など、気になることが多い。私が思うに、自然に興味をもつことが理科では最も大切で、その上に知識や思考力が育つものである。ところが現在は、生活体験から考えても昔ほど自然と接する機会が多くないので、授業の中でその機会を作る必要があると思う。今回の印教研では、どの部会の提案を見ても、私の必要とする内容が盛り沢山で大変うれしく思った。あまり堅苦しく考えず、一つでも二つでも取り入れ、生徒が楽しく、興味を持てる授業を展開していききたいと思う。